

## 国語の「やりくり」と評価

生田聡史

鳥取大学附属中学校 国語科

E-mail: ikuta\_st@tottori-u.ac.jp

**IKUTA Satoshi** (Tottori University Junior High School) : **Ingenuities and evaluation of classes of Japanese language.**

**要旨** — 本校で研究を推進している「やりくり」は、新学習指導要領で求められているものに非常に近いものであり、先進的であるといえよう。しかし、「やりくり」をいかに評価につなげればよいのかという点で、いまだあいまいな部分を残しており、「やりくり」の評価という、具体的な基準なり指標なりが必要になってきていると感じる。今回は、国語の一つの実践の中で、どのような評価ができるのかという点を考察する。

**キーワード** — 授業の評価, 国語

**Abstract** — “Ingenuities and management” which represents studies that have been promoted in the Tottori University Junior High School is very similar to those requested in “the New Curriculum Guidelines”. However, method and procedures of evaluation for those “ingenuities and management” are still unclear. Thus, it seems that specific standards and indicators are necessary in the evaluation. In this paper, I will discuss the issue how we can objectively evaluate ingenuities and devices in classes made by each teacher, through a practice of Japanese language class.

**Key words** — class evaluation, Japanese language, ingenuities

### 1. はじめに

昨年度から、研究同人として「やりくり」の授業に取り組んできた。本年度は一学年を担当する中で、いかに「やりくり」のもととなる基礎的な知識を系統立てたものとして個々の生徒に構築できるかという課題を持ち、授業開きを行った。系統立った基礎的な知識の構築は、昨年度の実践を踏襲している。(2.1.3. 参照)

そのうえで、「やりくり」授業を展開しようと試みた。様々な言語事項の基礎を応用的に発揮するために「やさしい日本語」(2.1.3. 参照)を題材とした。

以下は、本年度の本校研究大会(2019.6.29実施)での実践である。

### 2. 実践

#### 2.1. 研究大会での授業(指導案)

##### 2.1.1. 単元名

やさしい日本語～「優しい」は「易しい」～

##### 2.1.2. 単元における「やりくり」

○既習の言語事項の知識や考え方と結びつけることで、「やさしい日本語」の基本的なルールを理解できる。

○一般的な文章を「やさしい日本語」へ変換する際、グループ内で意見交換をすることにより、「易しい日本語」が練り上げられる。

○クラス内での意見のやりとりで、「やさしい日本語」は受け取る側によって良さが異なることを知り、多様な価値観を実感できる。

○「やさしい日本語」で観光案内を作成する上で、受け取る側の視点を入れることにより、相手意識が身についていく。

##### 2.1.3. 単元観

「やさしい日本語」とは、佐藤和之教授(弘前大学)らの提唱する、日本語に不慣れな外国人にも日本語を理解しやすくするために、文の構造を簡単にしたり簡易な表現を用いたりする日本語のことである。元々は、阪神・淡路大震災で被

災した外国人が緊急時の日本語の情報を理解しきれなかったという事実への対応策として考案された。この考え方は、外国人に対して「優しい」だけではなく、「易しい」日本語となっている。その考え方の基本的なルールは5つで、「重要度が高い情報に絞る。」「難解な語句は言い換える。」「災害時によく使われる重要な語句には解説を添える。」「あいまいな表現は避ける。」「複雑な文や長い文は、文の構造を簡単にする。」である。これは、中学一年生でも理解することができ、また使えるようになるのではないかと考えた。日本語に不慣れた外国人に伝えるという相手意識を持った文体を考えることは、これからの国際社会を生きていくのに必要な力となっていくものである。また、「やさしい日本語」の考え方で文章を読むことは、内容的確にとらえられるという点でもおおいに有効であろう。「易しい」は簡単にすることにつながり、「簡単」はまさに理解することにつながるからである。さらに、「やさしい日本語」を発展的に活用し、実際に外国人へ情報発信をしなくても考えられる。「やさしい日本語」を使って、鳥取をアピールするような観光案内として情報発信をしていきたい。

本校一年生は、男子75人、女子63人、計138人である。全クラスの授業開きでとったアンケートによれば、国語が「得意13%」「どちらかと言えば得意36%」「どちらかと言えば苦手45%」「苦手5%」であった。同アンケートで、国語が「好き39%」「どちらかと言えば好き37%」「どちらかと言えば嫌い20%」「嫌い4%」であった。「苦手」と「嫌い」はほぼ同じような数値となっているが、国語を「好意的」に捉えている割合に対して国語が「得意」と捉えている割合が低い。これは「国語が苦手」を「漢字を覚えていない」ことと考えていたり、「国語が好き」を「本(文章)を読むことが好き」と考えていたりという、一面的な捉え方をしていることによるようである。本校一年生にとって、「国語」とは「漢字を習得すること」や「登場人物の気持ちを考えること」で閉じてしまっているようであった。この際、漢字の習得方法から、文法(文の成分の位置関係)に関する学習までを一連の学習として、多くの言語事項に関する学習を結びつけ身につけた上で、「やさしい日本語」の学習に入りたいと考えた。「やさしい日本語」では、そこまで身につ

けた力を利用しながら、文の構造をいかに簡単に捉えられるかという読み取りにつなげられる。また、様々な思考をするにあたっては、個人での思考はもちろんであるが、国語グループによる話し合い・学び合いによりさらに深い思考につなげられる。この一連の流れが、国語に対するネガティブな部分を変化させることになっていくのではないかと考えている。さらに、今回の「やさしい日本語」では、相手意識を持つことも大切となってくる。ともすれば、主観でのみの思考に陥りがちな中学一年生が、伝える相手がいるということを意識できる单元でもある。相手意識を育て、客観性を育てられればと考えている。

学習を進めていく上で、まずは国語という教科の捉え直しをさせた。国語とは「話す・聞く」「書く」「読む」という既に身につけている力をレベルアップしていく教科だということである。さらに「漢字」を含む言語事項は、そのレベルアップするために必要なツールであるということである。その上で、「漢字の成り立ち(意符による意味の類似性・声符による読みの類似性)」「音読み・訓読み(音読みは漢語・訓読みは和語)」「熟語の読み方(基本は「音+音)」「熟語の構成(訓読みを使って熟語の意味をとらえる)」という言語(特に漢字)に関する学習を行った。続けて「言葉の単位(正しい文節の区切れ)」「文の成分(主語・述語を元にして、文の構造の理解)」という文法的な事項を学習した。これらの学習で身につけた力を思考の下支えとして、「やさしい日本語」の学習に入るのである。そもそも、「やさしい日本語」には完全な答えというのは存在しないので、個々の持つ言語感覚や、相手意識、さらには状況を察する力などにも大きく影響され、一律ではない答えにたどり着くことになる。それを個々の思考にとどめることなく、グループやクラスで意見を交流させることによって、より深く各々の「やさしい日本語」を見つめさせてみたい。多くの視点や価値観による多様な考え方に意味を見出し、関心を寄せることになっていけば、それはこれから生きていく力となり得るのではなかろうか。そしてここをきっかけに、「やさしい日本語」に限らず相手を意識した文章であったり、場面や状況に応じた文章形態を考えられたりするような成長につなげられればと考えている。

2.1.4. 単元目標

- 既習の言語事項と結びつけて、「やさしい日本語」の基本的なルールを理解する。
- 「やさしい日本語」への変換を、グループ内の意見交換で練り上げる。
- クラス内の意見のやりとりで、多様な価値観を実感する。
- 「やさしい日本語」で観光案内を考える上で、相手意識を身につける。

2.1.5. 学習計画 (全 8 時間)

第 1 次 「やさしい日本語」(光村図書 国語 2) から「やさしい日本語」について知る。

- (1) 阪神・淡路大震災のニュース原稿を外国人が分かるように書き直す。
- (2) グループの話し合いで、「やさしい日本語」の目的を知る。
- (3) 教科書の正解をもとに、「やさしい日本語」のルールを確認する。

第 2 次 「やさしい日本語」に変換し、自分なりの方法を身につける。

- (1) 例題をグループで変換し、グループごとの工夫に目を向ける。(本時)

第 3 次 「やさしい日本語」の考え方で、鳥取の観光案内を作る。

- (1) グループごとに観光案内の大まかなことを決定する。
- (2, 3) 観光案内を制作する。
- (4) グループごとに紹介し、批評し合う。

2.1.6. 本時の学習

- (1) 本時目標
  - ・グループで工夫しながら「やさしい日本語」に変換ができ、工夫のありようによって答えは一律ではないことを知る。
- (2) 期待される生徒の様相
 

観点「関心・意欲・態度」「書くこと」

A: グループで意見を出し合いながら、5つのルールをもとに「やさしい日本語」に変換ができ、自分なりのルールを加えることができる。

B: グループで意見を出し合いながら、5つのルールをもとに「やさしい日本語」に変換ができ、その良さを言葉にできる。

C: グループで意見を出し合いながら、5つのルールをもとに「やさしい日本語」に変換できる。

例題 A

(鳥取市観光ガイド鳥取旅時間より)

海と山に囲まれた鳥取は、豊かな自然が育む食の宝庫。移り行く季節に絶えず旬が到来し、“旬”の美味がいつも溢れています。江戸時代から海の玄関として栄える賀露(鳥取)港には新鮮な魚介があがり、朝から荷揚げや競りでにぎわいます。新鮮で良い食材が揃うため、素材本来の旨味を味わえるシンプルな鳥取のじげ料理が多く、特に獲れたての海鮮料理がオススメです。

例題 B

(鳥取市観光ガイド鳥取旅時間より)

ジオパークとは、科学的に見て特別に重要で貴重な、あるいは美しい地質遺産を含む一種の自然公園です。鳥取市の西端から京都府京丹後市の東端までの「山陰ジオパーク」は、ユネスコ世界ジオパークに認定されています。鳥取砂丘は、その代表的なジオパークの見どころのひとつです。

例題 C

(鳥取市さじアストロパーク宇宙の駅より)

星がいっぱい！  
ワクワクいっぱい！  
さじアストロパークは、口径 103cm 望遠鏡(キラット望遠鏡)やプラネタリウム、宿泊施設を備えた鳥取県唯一の公開天文台です。大人も子供も楽しみながら宇宙や科学を学ぶことができます。大自然の中でたくさんイベントも開催しています。  
ご家族と、お友達と、恋人と、もちろん一人でも、宇宙へとびらを開いてみませんか？  
宇宙と大自然があなたを待っています。

## (3) 本時の展開 (○教師の意図 ◇全体への支援 ◆個またはグループへの支援)

学習活動	教師の支援・意図
1 本時の目標を確認する。	○コンペ形式をとることで、より良いものにする工夫を引き出す。 ◇3種類の例題があり、それぞれの種類で良い作品を他の例題グループから選んでもらう。
観光案内の文章を「やさしい日本語」に変換しよう。	
2 グループで例題を「やさしい日本語」に変換する。	○例題の3種類はAを4、Bを4、Cを3準備し、3回のコンペで評価する他グループの数を均等に近づける。 ◇5つのルールを意識させる。 ◇個々の意見を統合し、グループ内の総意に近いものをホワイトボードに書く。 ◆遅れがちなグループには「重要でない部分はカットできる」ことを再確認させる。
3 例題ごとにグループで発表し、評価し合う。	○順位をつけるのではなく、「やさしい日本語」の良さを具体的に言うことにより、自分の感じる良さとは他者の感じる良さの共通点や相違点を感じさせる。 ◆担当した例題以外の評価をさせる。 ◇評価が出てこなかったグループに対しては教師が評価を与える。
4 新しいルールを加える。	○「やさしい日本語」には完全な答えがあるわけではなく、自分なりのルールを加えることが可能であることを実感させる。 ◇基本の5つのルールだけにとらわれなくて良いことを理解させる。 ◇「やさしい日本語」には一律の答えは存在しないことを知らせる。 ◆自他の評価言から思考させる。
5 本時の振り返りをし、次時の確認をする。	◇次時から、「やさしい日本語」の観光案内を、グループ単位で制作していくことを知らせる。

## 2.2. 授業実践について

## 2.2.1. 授業の様子

全体的に、時間が足りなかった。学習活動2において、グループ活動を行い、この活動が集団で思考する活動となるわけであるが、少々時間がかかり過ぎた。その結果、他グループからの評価言が非常に少なくなり、「やさしい日本語」を扱った自分たちの活動を、ポジティブに捉える材料が減ってしまった感がある。

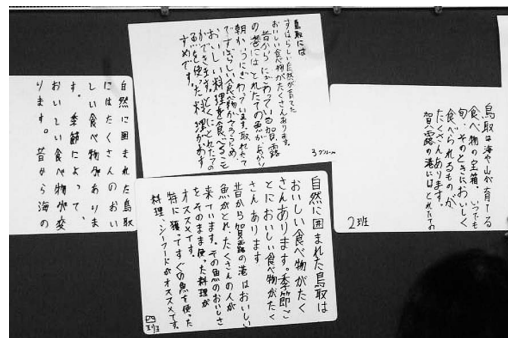
また、活動4の新しいルールを加えることについても、多様な捉え方や意見を交流する時間が少なかったため、生徒個々の実感としては若干乏しくなった感がある。

しかし、タイトな活動時間ではあったが、多くの生徒は生き生きと活動し、意欲の面では大いに評価できる授業となった。

## 2.2.2. 生徒の作品

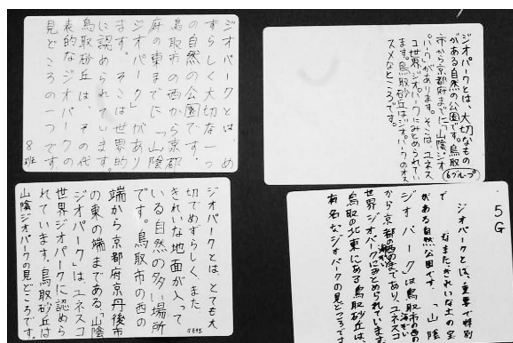
授業で生徒が作成した「やさしい日本語」を以下に提示する。

## 例題 A



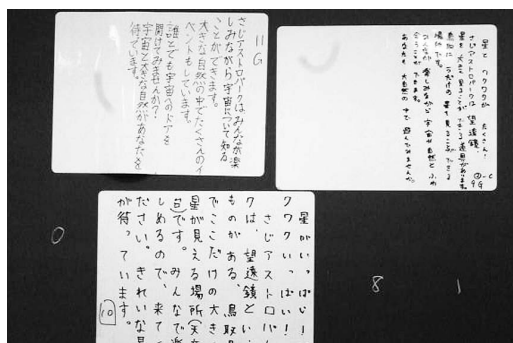
- 2グループがまとめきれなかった。
- かなり多くの言葉を削り、シンプルにしようという部分が見られる。
- 「旬」「にぎわう」など難意語句を使用している。

例題 B



- 中心は鳥取砂丘であるが、ジオパークの説明に苦心している。
- 鳥取砂丘やジオパークの位置を示す表現に分かりにくさが残っている。

例題 C



- 「ワクワク」などの擬態語は伝わりにくい。
- 比喩的な表現は伝わりにくい。
- 星を見られる部分が強調できている。

3. 評価について

3.1. 「やりくり力」の評価の現状

「やりくり」は、新学習指導要領にあらわされている「知識及び技能」「思考力、判断力、表現力等」「学びに向かう力、人間性等」という三つの柱のすべてにかかわってくる。とりわけ、「学びに向かう力」においては「やりくり力」は大いに発揮される場所である。

しかし、「やりくり力」を評価するとなると、基準があいまいになってくる。本校研究主任の中尾尊洋は、研究計画立案の背景において、「教員の経験的、感覚的な評価に科学的根拠を付加したい。」と述べている。

これは、各教員が教科の特性や個々の経験値で生徒の「やりくり力」を評価し、それは大きな誤差を生み出してはならないし、ろ、「やりくり力」とはどのように評価できる力なのかという、教科を横断するような明確な基準ができていないことを意味する。

3.2. 「やさしい日本語」の「やりくり」評価

3.2.1. 科学的根拠の材料として

上記の状況をふまえて、今回の授業を例として、どのように評価が可能か検討してみた。検討にあたっては、生徒の到達度を調査するため、評価の根拠となるデータを収集した。データとして用いたのは、授業後に自由記述させた質問紙であり、質問は「授業での新しい気づき」、「授業の感想」の2項目である。

3.2.2. 生徒の質問紙の回答

授業の後、当該クラスの生徒に質問紙において回答させた内容を以下の表に示した。上段は「授業での新しい気づき」、下段は「授業の感想」である。なお、番号はランダムである。

	授業での新しい気づき
	授業の感想
1	やさしい日本語の使われ方や、だれに対して使われるのかが分かった。 グループで話し合ったり、いろいろなことを考えたりできたのでよかった。
2	ふつうの日本語の文を「やさしい日本語」に変えるのは、難しい今回は、グループの班での活動だったのでいつもの授業より楽しく受けることができた。
3	外国人にとっての難しい日本語を分かりやすくおぼす、なおし方もそれぞれだと分かりました。重要なワードだけを絞って分かりやすかったです。(伝わりやすい)よく使用される難しい言葉には、解説がありました。 10班のメンバーが一番良い紹介文を作れてよかったです。(あまり意見は出せませんでした。)
4	班で考えを深めるのがとても大切だということ。 新しい授業のやり方をして、グループの人たちと、意味をまとめることができ、とてもよかったです。
5	観光ガイドのほん訳は難しいことが分かりました。 グループで話し合いながらやさしい日本語にできたので良かったです。
6	難しい文をやさしい文章にするには、覚えてもらってほしい単語のあとに意味を説明したり、文節に区切つたらいいということが分かった。 班の人と意見を聞き合ったり、一生懸命考えられたのでよかったと思います。
7	この授業で新しく易しい日本語をつくることや、易しい日本語の目的について理解することができました。易しい日本語をつくるうえで相手に分かりやすいようにすることを心がけたいです。 この授業で特に、相手のことを考えて、分かりやすく、簡単にすることを考えて易しい言葉をつくりました。これからもそのことを頭に入れてつくっていきたいです。
8	人それぞれ考えることがちがうので、グループの人の意見をみんなが納得するにはできないことがわかった。 グループの人と知恵を出し合って、良い「やさしい日本語」ができたと思うのでよかったです。
9	外国人の方々には読みにくい文章も、習ったことを使って改良することができた。 授業で学んだことを生かしながら、活動できた。
10	やさしい日本語は一通りだけでなく何通りもあるということがわかった。字数が少ない方がよいけれど、文はたくさんに分けたほうがよいとわかった。 本格的にグループで動いたのはじめてだったと思うけれど大勢の前で固まらずにできなかったです。
11	文章を客観的にみると全体での気づきが見えた。 グループずつの面白い意見があった。
12	やさしい日本語の変換のし方をじっさい自分たちでやってみることでよく分かった。 とても楽しくみんなで授業をうけることができた。
13	やさしい日本語にするためには、大事なことをくり返すのが大初めの研究大会だったので、あまり発表することができなかった。なので、次の研究大会はがんばりたい。
14	三人で考えればたくさんの工夫が生まれる。 みんなの考えや工夫が分かった。
15	5つのルールの使い方について分かったので、マスターできるようにしたいです。 みんなとしっかり話し合うことができて、でも発表できていなかったので次からはできるようにしたいです。

16	重要度が高い情報にしぼり、文を簡単に短くすると、すっきりと分かりやすくなる。大事、重要なキーワードは何回か繰り返すことで、インパクトが強くなる。
17	グループの友達が書いた文と自分の文の良いところを生かして「やさしい日本語」づくりに取り組めました。残念ながら、負けてしまったけれど、「やさしい日本語」のコツは、分かってきた。新しい考えが出てきておもしろかった。
18	やさしい日本語にするやり方が分かった。グループで、文章を変えていくのがおもしろかった。
19	ワクワクは、外国人には分からないことが分かったので、省略してもいいことが分かった。1回でも手を挙げて発表できたので、よかったし、グループになって、しっかりと考えることができた。
20	やさしい日本語がどうやったら分かりやすいかが分かった。おもしろかった。
21	やさしい日本語は、ただやさしくすればいいだけでなく、誰が読むか、分かってくれるかなど、読む相手のことを考えることでもっとやさしい日本語になるのではないかなと思いました。班でしっかり全員が意見を出し合えたので、うまくいったし、楽しかったです。話し合いの班で初めて話した人ともしっかり話し合えてうれしかったです。
22	外国人に日本語を伝えるとけっこうわかることがわかった。日本語を簡単にして外国人にわかるようにしたい。
23	班で考えることにより、さらなる発展につながり、良い文ができた自分たちではいい文章だと思っても、ほかの班から見たらまだむずかしいと思っているということが分かりました。
24	やさしい日本語は、接続語も意識する必要がある。だれも票を入れてくれなかったけどがんばりました。
25	文字の数を減らすことで、重要な言葉だけがピックアップされることが分かった。やさしい日本語に変えながらしゃべれるといいと思いました。

### 3.2.3. 「やりくり力」を評価

以上の質問紙の回答から、「やりくり力」をA・B・Cで評価した。評価にあたって、B評価の到達基準を「グループ活動を通して、やさしい日本語に変換でき、良さを感じている」とし、それに加えて想定以上に得られたと読み取れたものをA評価とした。B評価の基準に満たないと判断したものはC評価とした。この評価の分類をもとに、A・Cの各評価を特徴づけるキーワードを考察した。

〈A 評価としたものとその根拠〉

- 7 「易しい日本語をつくる」という新しいものを創造しようとしている点。相手意識を感じられる点。今後の意欲。
- 9 身に付けた既習事項を生かしながら、より良くしようとしている点。
- 16 新しいスキルを発見し身に付けようとしている点。グループ内で意見を融合しようとしている態度。
- 21 相手意識を強く感じ、より良く発展させようとしている点。グループで協働している点。
- 22 理解したスキルの効果を実感している点。今後に生かそうとする意欲。

〈C 評価としたものとその根拠〉

- 2 「難しい」という閉じた状態で終わっている点。グループ活動を「楽しい」という観点だけで終わっている点。
- 15 5つのルールは既習事項であるが、発展が見

られない点。「次からは…」と一見意欲的なようだが、具体的な反省がない点。

以上の個人の主観的な判断基準で評価を出した後、その中に共通する考え方やキーワード等はないか考察した。

#### 【A 評価について】

- ・創造的(クリエイティブ)な感覚を有している。
- ・身に付けたスキルの有用性を実感している。
- ・別の場面でも新しいスキルを使用しようと感じている。

#### 【C 評価について】

- ・解決しようとする意欲が乏しい。
- ・学習前と後での変化が見られない。

以上の評価を、私の「経験的・感覚的」な観点に基づいて判断した。

これらの判断を決定づけている要因を特定するため、各コメントの内容を抽象的に捉えることを試みた。その結果、

「A 評価は、創造的に言葉を活用しようとしている。」

「C 評価は、意欲が乏しく発展性が見られない。」

という判断の要因が推察された。このことから私自身が「やりくり」の力と捉えているものが、言葉を用いる創造性、および言葉を活用しようとする意欲が内包されるような力をイメージしていると考えられた。

## 4. まとめ

今回は、私個人の「経験的・感覚的」な部分を「やさしい日本語」という一授業を用いて明文化してみた。しかし言うまでもなく、これは「やりくり」の中のほんの一部でしかない。国語科においても一部分であるので、全教科においては本当に微々たるものである。

今後は研究同人と、より多くのデータを収集・分析して、全教科に共通する「評価規準」のようなものが作られれば、本校の取り組む「やりくり」がより一層科学的根拠に裏付けされる有効なものになっていくであろう。

本研究は、公益財団法人博報堂教育財団の研究助成を受け、実践、分析を行ったものである。